

今回は、大学院人間文化創成科学研究科人間科学系教授の浜口順子先生をご紹介します。  
 浜口先生は、大学院では人間発達科学専攻保育・児童学コース、また学部では生活科学部人間生活学科発達臨床心理学講座のご所属です。

## お茶大の「子ども学」をリレーする



*Hamaguchi Junko*  
**浜口 順子**

### Q. ご出身、ご経歴などについて教えてください

生まれたのは米国なのですが、3歳10か月から鎌倉、横浜、東京などで育ちましたので、日本の普通の教育を受けています。大学は、お茶の水女子大学家政学部児童学科に入りました。子ども時代を思い出すことが好きだったので、働く女性が増える中で保育の問題はこれから重要だと周りにアドバイスされたこともあり、決めました。

### Q. 当時のお茶大は？

学生運動から10年ぐらい経過したノンポリ（政治的無関心）の時代でしたが、今よりも政治や社会の動きに関心のある学生はまだ多かったと思います。

当時の児童学科というところは学際的総合的な教育を目指していて、先進的でユニークでした。「子ども」をテーマに、医学、心理学、比較行動学、法学、児童文化学など多分野の先生がいらっしやいました。その中で学生自身が「自分の」児童学をさがすことを問われていたと思います。だから興味があることを何でも追究できる自由さがありましたが、それだけ厳しかったともいえます。今も発達臨床心理学講座の授業に残っているインターンシップ（3年次）では、特別支援学校に通って、そこでの実践が卒論のテーマでした。

### Q. 大学院時代はどのように過ごされたのですか？

その後、本学の大学院修士・博士課程まで進みました。博士課程に入ってからすぐにオランダへ2年間、留学しました。当時、津守真先生が指導教員で、先生ご自身がオランダの現象学的教育学に刺激を受けていらしたのです。留学は米・英国などの英語圏も考えましたが、教育学をするならあまり大きな国に行かないほうがいいと言われました。オランダは小国ながら、オランダ語というマイナーな言語を守り、独自の文化と高い教育水準を築きあげた国です。留学中は、オランダ語を学びながら現地の子どもと遊び、大変ながらも面白かったです。

### Q. ご自身の子育て経験は保育・児童学研究にどのようにつながっているのでしょうか？

留学から帰国し、博士課程を満期退学し、

結婚、出産。夫が大分に転勤となった2年間、非常勤もできず専業主婦になりましたが、今思えば本当に貴重な楽しい時間でした。それでも、どこかキャリアへの焦りもあったと思います。

子育ては、児童学を勉強したから大丈夫かなと高をくくっていましたが、そんな甘いものではなく、1人目の子どものときなどは訳のわからないことばかりでした。でも2人目、3人目になると、子どもも人生も思い通りにはならないことが身に染みてきて、だんだん人並みの親になってきたかもしれません。子どもには申し訳ない気持ですが、保育学の研究に戻って、この経験が生かされていると思います。

### Q. 現在の研究内容について教えてください

学生時代に障害のある子どもとじっくり過ごした経験が根っこにあるせいでしょう、子どもの視点に立つことが、大人の関わり方をふれにくくするというにはほ確信があります。子どもに迎合するのではなく、大人と子どもは違うんだということを出発点にして関係性を築くのです。そういう子どもと大人の関係性が研究テーマです。

9年前にお茶大に就職してからは、日本で最古の国立幼稚園である附属幼稚園と、国立大学法人として唯一自主運営をしているいずみナーサリーがあるので、子どもたちを自由に観察させていただく機会が多く、また保育者の先生たちと話し合いなどもできるので恵まれていると思います。

平成22年度から、特別経費による「乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築」事業（略称ECCCELLエクセル）という教育研究プロジェクトを進めています。保育や子育てをテーマに保育現職者や社会人のための夜間授業やシンポジウムを開催したり、保育者養成関連の授業改革、附属園との共同研究などしながら、学外との関係も広がっています。また『幼児の教育』という明治34年創刊の

雑誌を附属幼稚園と協同して発行し続けています。東基吉、倉橋惣三、津守真先生、本田和子先生など歴々の「子ども学」研究者がリレーでつないできた雑誌です。創刊号からのバックナンバーを附属図書館のHPからダウンロードして読むことができます。貴重な歴史的資料ですので、ぜひ検索してください。（TeaPot / 幼児の教育）

### Q. 今のお茶大の印象とメッセージをお願いします

お茶大生は、もちろん母親になる可能性があり、また職場や地域などで子育てする人を、直接間接に多様な形でサポートする役割を担っていくべき人です。たとえば、育児を理由に休んだり早退したりする同僚を気持ちよく送り出せるような職場環境を作ることに、知恵や社会性を発揮してほしい。お茶大は、子どもを育てることが楽しいと思える社会を作ることにも貢献する学問や経験を積み場所だと思います。お茶大生はまじめで、どんな親になるべきか、どう子どもを育てるべきか、と「べき」ばかりでものを考えがちです。ゆったりと目的なしで子どもと遊ぶ時間をもって、一見ばかしく思えるような子どもの言動や発想の面白さ、真摯さをまじめに受け止められる視野を育ててください。でないと、その子らしさや、子どもならではの新鮮な知のひらめきを摘みとるばかりの大人になってしまうでしょう。それは、社会的にも大きな損失だと思います。

文責：刑部 育子  
 （大学院人間文化創成科学研究科人間科学系准教授）